

意味関係による連体修飾分析についての一考察

A Study on Semantical Analysis of Noun-Modifying Constructions

笠井 恵子*

KASAI Keiko

Teramura (1975-1978) categorized Japanese noun-modifying constructions (NMCs) into two types; “the inner relationship”, and “the outer relationship”. Teramura analyzed by using syntactic analysis to declare the relations between the head noun and the modifying clause. In terms of Teramura’s inner-relationship analysis, some NMCs seem forcefully to be categorized as an inner-relationship type by adding additional verbs. For example, a kind such as “*atama no yokunaru hon* (the book that makes you clever)” has been categorized as the inner-relationship type by adding some extra verb such as “*yomeba* (if you read)” to explain the relation between the head noun and the modifying clause. However, the relation between the head noun and the modifying clause can be explained without adding the additional verbs. This thesis suggests a new way to explain these inner relations by focusing on semantic analysis instead of common syntactic analysis for which adding extra verbs is needed.

キーワード：連体修飾 (Noun-Modifying Constructions(NMCs))、意味関係(Semantic)、内の関係(the inner relationship)、外の関係(the outer relationship)

1. はじめに

連体修飾表現についての研究はさまざまに行われてきたが、そのほとんどは、連体修飾表現を内の関係と外の関係に区分する寺村(1975-1978)を下敷きにして行われている。寺村によると、「さんまを焼く男」のように主名詞と修飾部の間に格関係があり、主名詞を修飾部が付加的に修飾しているものが内の関係であり、「さんまを焼く話」のように主名詞と修飾部の間に格関係がなく、修飾部が主名詞を内容補足的に修飾しているものが外の関係である。このような寺村の分類は、一見すると整合性が取れているが、寺村の挙げている統語的基準と意味的基準が連動していないケースも存在する。例えば寺村は、主名詞と修飾部の間に格関係がない「頭の良くなる本」のような例を内の関係に位置づけるために、「読めば」という表現を付け足し、そこに格関係を認めると説明しているが、本来存在しない表現を補填するという方法は恣意的であると言わざるを得ない。また「さんまを焼くにおい」や「塚を掘った祟り」のような例は、「述語の事態により発生したもの」を表わす格助詞が日本語にないことから、内の関係としての意味的基準

は十分に満たしているものの、外の関係に位置づけられている。そこで本稿では、寺村の分類の精緻化を行い、連体修飾表現の本質に迫ることを目的とする。

2. 先行研究

まずは先行研究を概観し、問題の所在を明らかにする。

(1) 寺村(1975-1978)を巡る議論

1) 寺村(1975-1978)

寺村によると、連体修飾表現は「内の関係」と「外の関係」の二つに大別するものであり、さらにその中で下位分類がなされている。寺村は内の関係か外の関係かに分類する方法として、意味的基準と統語的基準の二つを挙げている。

【内の関係】

内の関係とは、主名詞と修飾部の間に格関係があり、修飾部が「底の名詞¹を『付加的』に修飾している(寺村(1975:110))」ものである。その中には例文(1)(2)のような典型的内の関係と、例文(3)(4)のような短絡と呼

* 大阪観光大学観光学部非常勤講師／日本語学、大阪観光大学日本語別科非常勤講師

ばれる構文がある。短絡については後述する。

- (1) さんまを焼く男 (寺村(1977a))
- (2) 男が焼くさんま
- (3) 頭の良くなる本 (寺村(1977a))
- (4) 高校入試に絶対受かる家庭教師 (松本(1993))

【外の関係】

外の関係とは、主名詞と修飾部の間に格関係がなく、修飾部が「底の名詞を『内容補足的』に修飾している(寺村(1975:111))」ものである。外の関係はその主名詞と修飾部の間の意味関係から、さらに「ふつうの内容補充」と「相対的補充」の二つに分けられている。以下の例文(5)(6)(7)が「ふつうの内容補充」に、例文(8)(9)(10)が「相対的補充」にあたる。

- (5) 男の子が鬼ヶ島へ鬼退治に行く話
- (6) 期日まであと 10 日しかないという事実
- (7) さんまを焼くにおい (寺村(1977b))
- (8) 米子に泊まった朝(前日一翌日(時間的相対性))(寺村(1977b))
- (9) 丸井が走っている後ろ(前一後ろ(空間的相対性))
- (10) 塚を掘った祟り(原因一結果(因果関係的相対性))(寺村(1977b))

寺村(1975-1978)による内の関係と外の関係に分類する際の統語的基準と意味的基準は、以下のようにまとめられる。

	統語的基準	意味的基準
内の関係	主名詞と修飾部の間に格関係がある	修飾部が主名詞を付加的に修飾している
外の関係	主名詞と修飾部の間に格関係がない	修飾部が主名詞を内容補足的に修飾している

2) 短絡は内の関係か

前述のように、内の関係には短絡と呼ばれる形式が含まれており、前節の例では、例文(3)(4)がこれにあたる。例文(3)を例にとると、「頭の良くなる本」の主名詞「本」それ自体にどのような格助詞を付けても、それだ

けでは修飾部とは結びつかない。しかしながら「本」と意味的につながりの深い動詞「読む」を付け足せば、以下のように格関係を見出すことができる。

- (11) 頭の良くなる本 (例文(3)再掲)
→ 読めば頭の良くなる本
→ (その)本を読めば頭の(=が)よくなる。

短絡構文について寺村は、以下のように記述している。

「ソノ〔名詞〕ヲ～スレバ・・・・(スル)ナル」という文型で、「～」にあたる動詞が、前の名詞と意味的つながりが深い、つまり誰でもある名詞についてすぐ連想する動詞(たとえば食べ物なら「食ベル」、楽器なら「ヒク」というふう)に)であるならば、「～スレバ・・・・スル(ナル)+名詞」の「～スレバ」を省いて「・・・スル+名詞」という連体修飾構造ができる、ということになる。(寺村(1977a:76-77))

寺村の説明は一見内の関係のマイナーケースをも掬った説明であるように見受けられるが、何を以ってある動詞を「前の名詞と意味的つながりが深い」とするかについては述べられていない。つまり「本」から「読む」を、「家庭教師」から「教わる」を連想しやすいことは事実であるが、その関係性は絶対的なものではない。また特定の動詞を想起しにくい名詞が主名詞に来ることも十分に考えられる。例えば例文(12)の場合、主名詞である「秘訣」に特別に意味的つながりが深い動詞というものは想定できないが、主名詞と修飾部の意味関係は例文(11)のそれと大差ない(詳細は3章4節を見られたい)。

- (12) 絶対に合格する秘訣
→? 使えば絶対に合格する秘訣
→? (その)秘訣を使えば絶対に合格する。

つまり寺村における短絡の説明は、たまたま何らかの特定の動詞を想起しうる名詞が主名詞に来た場合にのみ適応する説明であり、その説明が常に適応するとは限らない。

なお井口(1995)では、「～スレバ…」という接続以外で

も「子供の成績がちっとも上がらない塾(その塾に行っても)」のように短絡の連体修飾表現を作れることに着目し、寺村の短絡を以下のように一般化しているが、特定の動詞が想起されない主名詞についての説明が十分であるとはいいがたい。

一般に連体修飾構造において、被修飾名詞と修飾部を関係づける述語が被修飾名詞と結びつくコロケーションでもある場合、修飾部からその述語を含む文節を省略し、短絡した構造にしても意味解釈は成り立つ。

(井口(1995:15))

(2) 益岡(2002)

益岡(2002)は、寺村における「ふつうの内容補充」の一部も短絡の一角である可能性について示唆している。

(13) 紅衛兵が線路の上を歩いている写真(寺村(1977b))

(14) 大きな眼の女性が扇を手にしてかすかにほほえんでいる絵 (寺村(1977b))

これらは寺村では外の関係の「ふつうの内容補充」に位置づけられているが、益岡は以下のようにある表現を補うことで、主名詞と修飾部の間に格関係が認められるため、短絡に位置づけられるとしている。

(13)' 紅衛兵が線路の上を歩いているところが写っている写真

→紅衛兵が線路の上を歩いているところが写真に写っている。

(14)' 大きな眼の女性が扇を手にしてかすかにほほえんでいるところが描かれている絵

→大きな眼の女性が扇を手にしてかすかにほほえんでいるところが絵に描かれている。

従来外の関係に位置づけられてきたものの一部を内の関係と捉えるという点で、連体修飾分析の議論に一石を投じたといえる。しかし益岡の示すところである、なんらかの表現を補うことで、主名詞と修飾部の間に格関係が認められるという議論には疑問が残る。なぜなら特定の表現を補うことで格関係を認めるというならば、以下

のような意味的基準においては間違いなく外の関係であるものも短絡ということになるからである。

(15) 男の子が鬼ヶ島へ鬼退治に行く話(例文(5)再掲)
→男の子が鬼ヶ島へ鬼退治に行くことが語られている話

→男の子が鬼ヶ島へ鬼退治に行くことが(その)話で語られている。

(16) 結婚式でお互いの手首に木綿糸を結びつける風習
→結婚式でお互いの手首に木綿糸を結びつけることが決められている風習

→結婚式でお互いの手首に木綿糸を結びつけることが風習で決められている。

つまり益岡の議論は、それまでの内の関係、外の関係という分類に新たな視点を提案したという点で評価されるが、意味的基準による、内の関係は修飾部が主名詞を「付加的」に修飾し、外の関係は修飾部が主名詞を「内容補充的」に修飾するという説明を満たしていないといえる。

なお益岡(2002)に沿ってみれば、益岡が指摘した「ふつうの内容補充」のみならず、「相対的補充」においても同様のケースが見られることを付記しておきたい。

(17) 塚を掘った祟り (例文(10)再掲)
→塚を掘ったことで生じる祟り

→塚を掘ったことで、祟りが生じる。

(18) たばこを買ったおつり (寺村(1977b))

→たばこを買ったときにもらったおつり

→たばこを買ったときに、おつりをもらった。

(3) 問題の所在

ここで生じる疑念は、従来いわれていた短絡というもの、何らかの表現を恣意的に付け足した上で主名詞と修飾部の間の格関係を認めさせているようなものなどということである。つまり、文に開いた²ときに主名詞と修飾部の間に格関係があるものが内の関係であり、それ以外が外の関係であるという規定を捉え直す必要があるのではないだろうか。それでは、内の関係と外の関係の真の共通性は一体どのようなものであろうか。

本稿では、従来の寺村以降の分析で重視される傾向にあった格関係の有無という統語的基準ではなく、主名詞と修飾部間の意味関係を重視し、新たな連体修飾の分類を提案する。

3. A型(拡大内の関係)

本章では、一般的な知識によって、主名詞が修飾部の事態に位置づけられるタイプの範囲を示す。なお以降の議論は、寺村のいう内の関係、外の関係との混乱を避けるため、本稿で提案する「拡大内の関係」ともいべきものを「A型」、「縮小外の関係」を「B型」と称する。

(1) A型の概観

A型というのは、端的に言えば寺村のいう内の関係の範囲を拡大したものである。そもそも寺村の内の関係に曖昧さが残るのは、前述のように主名詞と修飾部の間に格関係があるという統語的基準と、修飾部が主名詞を「付加的」に修飾しているという意味的基準の二つが採用されているからである。双方の基準が同時に満たされることが比較的多いのは事実であるが、常に双方の基準が同時に満たされるというわけではない。寺村の分類は、統語的基準と意味的基準の双方が満たされたもの、およびある表現を補填することで、擬似的に統語的基準が満たされるようになったもの(短絡構文)のみを内の関係とし、意味的基準のみを満たしているものを格関係が認められないという共通性によって外の関係に位置づけてしまった点に問題がある。

今後A型についての考察を続けるにあたってまず議論すべきは、そもそも格関係は何を表示するものであるかについてである。日本語記述文法研究会(編)(2009)によると「格とは、名詞と述語とのあいだに成り立つ意味関係を表す文法的手段である(日本語記述文法研究会(編)(2009:3))」とされている。寺村が内の関係とした主名詞と修飾部が格関係で結ばれるものも、つまりは「何らかの意味関係によって、主名詞と修飾部が結ばれている」という関係である。そして連体修飾表現を意味的に考察するにあたって重要なのは、格関係は意味関係を表わす方法のひとつであり、かつひとつであるに過ぎないという視点である。主名詞と修飾部が格助詞で結ばれるのは、いわば万人にとって分かりやすい主名詞と修飾部

の関係の表示の仕方である。しかしながら、現実には格助詞で表わされる関係性以外にも、実に多様な関係性が存在し、格助詞で表わされる関係性は、我々が語る関係性のよくあるパターンを捉えているに過ぎない。つまり、ある名詞と述語との関係性は、現代日本語に存在する限られた格助詞では、必ずしも表現しきれるとは限らないのである。

また格関係を判断の指標とする場合、加藤(1999)でも述べられているように、格関係のない名詞の副詞的用法についてどのように考えるかという問題もある。

(19) 昨日__、台風で市内の小中学校は休校だった。
(加藤(1999))

(19)' 台風で市内の小中学校が休校だった昨日

以上の理由から本稿ではA型を、「文に開いたときに主名詞が格助詞で表示されるもの」ではなく、「主名詞が何らかの意味関係によって、修飾部の事態に位置づけられるもの」であると定義する。つまり、A型の主名詞は修飾部の事態に何らかの形で参与しており、主名詞も修飾部の事態を構成する一要素であるということである。そしてその参与の仕方には、格助詞で表わされる関係性のほか、格助詞では表わされないものの、我々のもつ一般的な知識によってその関係性を把握できるものも存在する。

【A型(拡大内の関係)の定義】

一般的な知識によって、主名詞が修飾部の事態に位置づけられるもの。

[修飾部] ある事態

[主名詞] 事態の一部

(2) A型の典型—文に開いたときに主名詞が必須補語になるもの—

まず、A型の典型について定める。ここでいう典型とはすなわち、主名詞を修飾部の事態の中に位置づけるのが最も容易であるものをいう。これはすなわち、文に開いたとき主名詞が修飾部の末尾にある動詞の必須補語として再現される場合である。2章3節で、文に開いたときに主名詞と修飾部の間に格関係があるものが内の関係

であるという定義を捉え直す必要があると述べたものの、多くのA型の連体修飾表現において、主名詞が格関係で表わされる関係性によって、修飾部の事態の中に位置づけられることは事実である。そしてさらにその中でも典型となるものは、主名詞と修飾部が必須補語で結ばれる関係であると考えられる。それは、必須補語と動詞は意味的にも統語的にも強固に結びつく関係で、必須補語は最も容易に動詞が表わす事態の中に位置づけられるからである。

例えば、以下の例文(20)では、主名詞「男」が「さんまを焼く」という事態において動作主という形で参与する、つまり文に開いたときガ格で再現されるという解釈が普通である。それは意味的には、「さんまを焼く」という事態に「男」を位置づけるにあたって最も想起しやすい関係性が動作主だからであるといえ、また統語的には、動詞「焼く」の必須補語であるが修飾部で表わされていないガ格が、文に開いたときの格として最も可能性が高いからであるといえる。

(20) さんまを焼く男 (例文(1)再掲)

なお当然のことながら、実際は「男」の「さんまを焼く」という事態への参与のし方は、動作主以外にも、共同動作の相手とも想定しうる。連体修飾表現においても、「男」を共同動作の相手(ト格)とする読みも不可能ではないが、動詞が構造上求める格という強い関係性をもつガ格読みを打ち消すために、例文(21)のように「いっしょに」や「共に」を付け足す必要があり、ガ格読みとト格読みはその再現のコストに大きな違いがあるといえる³。

(21) いっしょにさんまを焼く男
→男といっしょにさんまを焼く。

(3) A型の周辺①—文に開いたときに主名詞が副次補語になるもの—

また、主名詞が修飾部の末尾にある動詞の必須補語でない場合においても、我々は主名詞と修飾部の間の意味関係を捉え、主名詞を修飾部の事態の中に位置づけることができる。そのよくあるタイプのひとつが、連体修飾

表現を文に開いたとき、主名詞が副次補語によって修飾部の中に再現されるものである。

例えば例文(22)において、「夏津がいつも食べる」という事態の中に「食堂」を位置づけるには、必須補語であるヲ格が欠落しているとはいえ、行為の場所を表わすデ格でしかありえない。

(22) 夏津がいつも食べる食堂

この連体修飾表現を解釈するには、「食堂」はある種の間を指し示すという一般的な知識により、「夏津がいつも食べる」という事態の中に主名詞「食堂」を行為の場所として位置づけるのが、最も自然であるというような思考のプロセスを踏んでいると考えられる。ただし、動作主によっては「食堂」が行為の場所以外の関係性になることは十分に考えられる。

(23) ゴジラがいつも食べる食堂

例文(23)を見ると、「食堂」がゴジラの行為の場所であるという読みのほかに、動作の対象であるという読みも現れる。つまり、文に開く格助詞として、以下の二つの可能性が考えられる。

(23)' a. ゴジラが(その) 食堂でいつも食べる。
b. ゴジラが(その) 食堂をいつも食べる。

しかしながら(23)bのような「食堂」を行為の間ではなく動作の対象とする読みは、動作主が怪獣であるならいざ知らず、例文(22)のように動作主が人間である場合、通常想定されない。それはつまり、「人間がいつも食べる」ことと「食堂」を結びつける関係性の可能性と、「怪獣がいつも食べる」ことと「食堂」を結びつける関係性の可能性は同一ではなく、どのような関係性で結びつけるかは我々のもつ一般的な知識に依るところが大きいのである。なお同様の指摘が松本(1993)でなされている。

このようにこれらは、主名詞を修飾部の事態の中に位置づけるのに一般的な知識を用い、その結果、偶然その関係が文に開いたときに格関係で結ばれる関係であったといえる。この場合の主名詞と修飾部は、意味的には強

固に結びついているものの、統語的には必須補語ほどの強固な結びつきではないため、A型の周辺とする。

以上のように前節と本節では、修飾部の事態に主名詞を格関係によって表わされる関係で位置づけられる、いわば分かりやすい関係性をもつ連体修飾表現について述べた。次節以降では、現代日本語ではその関係性が格助詞で表示されないものについて言及していきたい。

(4) A型の周辺②—文に開いたときに主名詞が複合助詞になるもの—

前節までのようにA型の連体修飾表現において主名詞と修飾部が格関係によって結びつけられるものが相当に多いのは事実である。しかしながら連体修飾表現の中には、主名詞と修飾部を格関係では結びつけられない例も多く存在する。そのうちのひとつが、加藤(1999)他で指摘があるように、例文(24)のような「～について」などの複合助詞によって主名詞と修飾部を結びつけることのできるタイプである。

- (24)a. 美樹が話していた論文
 (24)b. ??美樹がその論文を話していた。
 (24)c. 美樹がその論文について話していた。

例文(24)において、(24)b.のように主名詞をヲ格で再現すると不自然に感じられる。自然な文にするためには、(24)c.のように「～について」で主名詞を修飾部の事態に位置づけなければいけない。

このような例は文に開いたときに格関係で結ばれないが、意味的なことをみれば内の関係の基準を満たしているといえる。この類についても本稿の基準でいえば、「論文」は「美樹が話していた」という事態に参与し、その事態の構成要素のひとつとなるため、A型に位置づけられる。

また、寺村(1975-1978)では短絡とされていたものの中には、「～スレバ…」などの動詞を補わずとも複合助詞を以って文に開けるものもある。

- (25) 頭の良くなる本 (例文(3)再掲)
 → (その)本を読めば頭が良くなる。
 → (その)本によって頭が良くなる。
 (26) トイレに行けないコマーシャル (松本(1993))
 → (その)コマーシャルを見るために、トイレに行けない。

→ (その)コマーシャルによってトイレに行けない

もちろん、短絡の中には複合助詞のみでは容認度が下がり、動詞を補った方が自然なものもある。

- (27) 自分が腹を痛めた女 (寺村(1977))
 → 女を生むために自分が腹を痛めた。
 →? 女のために自分が腹を痛めた。

しかしながら、例文(25)「頭のよくなる本」と例文(27)は、以下に示したように、主名詞と修飾部の間の意味関係において差は見られず、他の類であるという論拠は薄い。

- (25)' [要因「本」] → 「[頭が良くなる]」事態が成立
 (27)' [要因「女」] → 「[自分が腹を痛めた]」事態が成立

本稿は便宜上、A型をいくつかのタイプに分けて説明を試みているが、このような例は文に開いたときに主名詞に付く表現でのタイプ分けは本来不要で、主名詞が修飾部の事態に位置づけられることのみがA型たる条件であると示唆しているように感じられ、興味深い。

(5) A型の周辺④—修飾部の事態によって主名詞が生じるもの—

前節と同様のことが、寺村が外の関係としたものうちの一部でいえる。本稿では、寺村が「感覚の名詞⁴」としているものや、「相対的補充」としているものうち、修飾部の事態が主名詞の成立要件であるもの、つまり修飾部の事態によって主名詞が生じるものは、主名詞が修飾部の事態に参与していると考え、A型に分類する。例を挙げると、以下のようなものである。

- (28) さんまを焼くにおい (例文(7)再掲)
 (29) 酒が熟成した香り
 (30) 誰かが廊下を歩く足音
 (31) 塚を掘った祟り (例文(10)再掲)
 (32) 唇をあてたよごれ (寺村(1977b))
 (33) 海岸で転んだ傷跡

例文(28)を例に取ると、確かに主名詞「におい」と修飾部「さんまを焼く」の間に格関係は存在しないが、本稿の観点において重要なのは、我々が主名詞と修飾部の二つともをひとつの事態の中に位置づけることができるということである。「におい」は「さんまを焼く」ことによって発生するものであることは誰もが知っており、その関係性は明白である。また例文(31)も例文(28)と同様に、主名詞と修飾部の間に格関係によるつながりがなくとも、我々はこの例文を見たとき、一般的な知識によって、「祟り」は「塚を掘った」ことの結果として生じたものであるというように、両者の関連性を理解できるのである。

従来これらは外の関係に入れられてきたが、例えば「さんまを焼く男」、「さんまを焼くにおい」、「さんまを焼く話」を比較してみると、「さんまを焼くにおい」と「さんまを焼く話」は格関係がないという共通点がある一方、主名詞と修飾部の間の意味関係を見てみると、「さんまを焼くにおい」は「さんまを焼く男」に近い性質をもつといえる。「さんまを焼くにおい」は、「さんまを焼く」ことを行った結果、その場に「におい」が存在していることを語っている。これは「さんまを焼く」という事態に「におい」が嗅覚によって参与しているということで、「さんまを焼く」と「におい」が同じ場に存在していることを表わしている。これは「さんまを焼く男」が、「さんまを焼く」ことに「男」が動作主として参与しており、「さんまを焼く」と「男」が同じ場に存在しているのと同様の関係である。しかしながら、「さんまを焼く話」の場合はそうはいかない。さんまを焼いているところに居合わせても、そこに「話」は存在しない。「さんまを焼く」ことを「話」であると捉える人がいて初めて、「さんまを焼く話」が世界に存在することになる。すなわち、「さんまを焼く」と「話」は同じステージになるのである。

また、ここで注目すべき点は、現代日本語は「述語の事態により発生したもの」を表わす格助詞をもたない言語だということである。寺村の基準では、もし仮に「述語の事態により発生したもの」を表わす格助詞が存在したとすれば、これらの表現は内の関係に分類されるが、本稿では分類基準を格関係に求めないため、そのような格助詞があろうがなかろうがこのような例はA型に分類

するという立場を取る。

なお、この類に入れられるものの中には益岡(2002)の指摘のように、何らかの表現を補填することで格関係が認められるものもあることは事実である。しかし前にも述べたように、本稿では格関係というものを、特定の意味関係で結びつける手段のひとつに過ぎず、我々のもつ一般的な知識もまた、特定の意味関係で結びつける手段のひとつであるという立場を取る。連体修飾分析において一般的な知識を用いることに関して、奥津(1974)では以下のような記述があり、示唆的である。

「湯がたぎる音」とか「魚を焼く煙」というような場合、我々は常識として「釜の中で湯がたぎる」とことと「音」との結びつき、「魚を焼く」とことと「煙」との関係は知っているが、この関係をどう一般化し、言語学的に解釈し、形式化したらよいか。このようにして同格連体名詞と補足文との関係は、言語学の領域から、それを越えた非言語的な人間の知識の領域にまで発展して行かなければ処理しきれなくなる。(奥津(1974:194))

(7) A型のまとめ

以上の議論をまとめると、以下のことがいえる。

- [I] A型は一般的な知識によって、主名詞が修飾部の事態に位置づけられるものである。
- [II] A型の典型は、文に開いたとき主名詞が修飾部の事態に必須補語として再現されるものであり、周辺に副次補語、複合助詞で再現されるものや短絡といわれる表現、修飾部の事態によって生じたものを主名詞とするものがある。主名詞と修飾部の関係性は、格関係で表わされるものもあれば、表わされないものもあるが、我々のもつ一般的な知識によって主名詞と修飾部が結びつけられるという点で共通である。

4. B型(縮小外の関係)

本章では、B型について論じる。寺村の分類では、外の関係は格関係のないもの、つまり内の関係ではないものという否定的共通性によってまとめ上げられており、そこに内面的な共通性は語られていなかった。そこで本章では、B型の内面的共通性の説明を試みる。

(1) B型の概観

以下の例は寺村(1975-1978)において、それぞれ「ふつうの内容補充」と「相対的補充」とされてきた例である。

- (34) 男の子が鬼ヶ島へ鬼退治に行く話(例文(5)再掲)
 (35) 智子がバドミントンをしている上(で、剣道部が練習している。)

この二つの例における主名詞と修飾部の関係性については、主名詞が非飽和的性質をもち、修飾部によってその非飽和的部分を語るという共通性がある。例文(34)の主名詞である「話」についていえば、その内容がなく、ただ「話」という輪郭のみが存在しているという事態は想定できない。つまり、「話」のような名詞は、前提として内容が存在するという意味的性質をもつといえる。また同様に、例文(35)の主名詞である「上」も、何を基準にしての「上」であるかを設定しなければいけないという性質をもつ。つまり、「上」のような名詞は、前提として基準点が存在するという意味的性質をもつといえる。このように、意味の側面からこれらの主名詞を見ると、これらの名詞はある情報を内包する余地がある、非飽和的性質をもつ名詞であるという共通性が窺える。

A型とB型の異なる点は、A型の主名詞は修飾部の事態に何らかの形で参与するのに対し、B型は修飾部のみで事態を構成し、主名詞は修飾部の表わす事態そのものには登場しないという点である。そしてA型の主名詞と修飾部間の意味関係は多様であるのに対し、B型の主名詞と修飾部間の意味関係は限られたものである。

以下にB型の主名詞と修飾部の意味関係を一般化して提示する。

【B型(縮小外の関係)の定義】

主名詞が何らかの情報を求めるという性質をもち、修飾部が主名詞の求める情報を語るもの。

〔修飾部〕主名詞の求める情報(内容・基準点)

〔主名詞〕情報を求める名詞

次節より、例文(34)のタイプと例文(35)のタイプをそれぞれ「情報の内容と情報のかたち」タイプ、「基準点と述べたいところ」タイプと呼称し、考察を行う。

(2) 「情報の内容と情報のかたち」タイプ

「情報の内容と情報のかたち」タイプとは、修飾部で

内容が語られており、主名詞によってそれがどのような情報であるかが規定されているものである。これは、寺村のいう外の関係の「ふつうの内容補充」から「感覚的名詞」を主名詞とするものの一部を除いたもの、もしくはMatsumoto(1997)のいうNH-type⁵(Noun Host Type、名詞主体型)に相当する。その例は以下に示す通りである。

- (36) 男の子が鬼ヶ島へ鬼退治に行く話(例文(5)再掲)
 (37) 期日まであと10日しかないという事実
 (例文(6)再掲)
 (38) 紅衛兵が線路の上を歩いている写真
 (例文(13)再掲)
 (39) 真木さんが黙々と作業をこなしている姿

例文(36)において、語られる事態は「男の子が鬼ヶ島へ鬼退治に行く」という修飾部であり、その事態は主名詞「話」と関わりなしに修飾部のみで完結している。そして主名詞は修飾部で語られた内容の情報としてのあり方を表わしているという意味関係である。また同様に例文(38)では、「紅衛兵が線路の上を歩いている」という事態は主名詞「写真」と関わりなしに成立し、「写真」はその事態がどのような形状の情報として存在しているかを表わしている。

これらはそれぞれ、「男の子が鬼ヶ島へ鬼退治に行く」、「紅衛兵が線路の上を歩いている」という語るべき内容を、「話」、「写真」という情報の捉え方で以って包み込み、語っている。

この類の主名詞と修飾部の意味関係を一般化すると、以下ようになる。

【「情報の内容と情報のかたち」タイプ】

〔修飾部〕語るべき内容

〔主名詞〕情報の捉え方

(3) 「基準点と述べたいところ」タイプ

「基準点と述べたいところ」タイプとは、主名詞に対して修飾部が位置、時、量などの基準点となっている意味関係のものである。例えば、以下のような例がある。

- (40) 智子がバドミントンをしている上(例文(37)再掲)
 (41) 私達が読書をしている外(で、子どもが笑い声をあげて遊んでいる。)
 (42) 久美がベトナムへ旅立つ前日

- (43) 夕食を食べる前
- (44) 頼まれた半分(しか仕事を終わらせられなかった。)
- (45) 宝くじに当たった40%(を旅費に当てようと思う。)

これらはそれぞれ、主名詞と修飾部の間に空間的相対性(例文(40)(41))、時間的相対性(例文(42)(43))、量的相対性(例文(44)(45))をもっている。そしてこれらの主名詞である「上」、「外」、「前日」、「前」、「半分」、「40%」はいずれも、どこに対しての「上」、「外」であり、いつに対しての「前日」、「前」であり、何に対しての「半分」、「40%」であるかという基準がなければ意味をなさない。そしてその基準となることを修飾部で表わしているという意味関係にある。これらの主名詞と修飾部の関係性はそれぞれ、以下のように一般化できる。

- 空間的相対性 「基準となる位置」—「語るべき位置」
- 時間的相対性 「基準となる時」—「語るべき時」
- 量的相対性 「基準となる量」—「語るべき量」

つまりこの類は、語るべき位置、時、量に対して、基準となる位置、時、量を補充する関係にあるといえる。これらは主名詞の具体的な内容を修飾部で表わすという関係にないため、前節で述べた「情報の内容と情報のかたち」タイプとは異なる。しかしながらこの二つのタイプは、主名詞が何らかの情報を求め、修飾部が主名詞の求める情報を語るものという共通性がある。

この類の主名詞と修飾部の意味関係を一般化すると、以下のようなになる。

- 【「基準点と述べたいところ」タイプ】
- 〔修飾部〕 基準となる位置、時、量
- 〔主名詞〕 語るべき位置、時、量

(4) B型のまとめ

以上の議論をまとめると、以下のようなことがいえる。

- 〔I〕 B型とは、主名詞が何らかの情報を求めるという性質をもち、修飾部が主名詞の求める情報を語るものである。A型は主名詞が修飾部の事態に参与するのに対し、B型の主名詞は修飾部の事態に参与しないという点で違いがある。
- 〔II〕 B型は主名詞と修飾部の意味関係から、修飾部が語るべき内容を、主名詞が情報の捉え方を表わす

「情報の内容と情報のかたち」タイプと、修飾部が基準点となる位置、時、量を、主名詞が語るべき位置、時、量を表わす「基準点と述べたいところ」タイプの二つに分けられる。

5. おわりに

本稿では、主名詞と修飾部の間の格関係の有無を重視した従来の分析から、主名詞と修飾部の間の意味関係を重視する分析へのシフトを提案した。

寺村をはじめとする従来の研究では、主名詞と修飾部の間に格関係があるものを「内の関係」、格関係がないものを「外の関係」と呼び二つに分類していたが、本稿ではその意味関係に着目し、「A型(拡大内の関係)」と「B型(縮小外の関係)」の二分類を提案した。寺村の分類と本稿の関係性をまとめると、以下の表のようになる。

	寺村		本稿		
主名詞が修飾部の必須補語	内の関係		A型	典型(3(2)章)	
主名詞が修飾部の副次補語				周辺(3(3)章)	
短絡					
複合助詞によって主名詞と修飾部が結ばれるもの	記載なし			周辺(3(4)章)	
修飾部の事態によって主名詞が生じるもの	外の関係	ふつうの内容補充	B型	周辺(3(5)章)	
修飾部が主名詞の内容を表わすもの				情報の内容と情報のかたち(4(2)章)	
空間的相対性				相対的補充	基準点と述べたいところ(4(3)章)
時間的相対性					
量的相対性					
因果関係			A型	周辺(3(5)章)	

ただしこの問題に関しては、さらなる精緻化の余地が残されている。今回の分析では、B型を「主名詞が何らかの情報を求めるという性質をもち、修飾部が主名詞の求める情報を語るもの」という共通性でまとめたが、この共通性はひとつのタイプとしてまとめるだけの強力な共通性であるかという疑問もある。つまり、本稿で述べたB型を、B型とC型に分けたほうがよい可能性もあるということである。そのような可能性も視野に入れつつ、今後さらに考察を深めていきたい。

【補注】

- ¹ 寺村(1975-1978)の用語で、「主名詞」と同義である。
- ² 加藤(2003)他に倣い、本稿では装定を述定に転換することを「文に開く」という。
- ³ 井上(1975)では、日本語の関係節化の可能性として、以下の序列を示している。
主語>直接目的語>間接目的語>位置格(に)>位置格(を)>目標格(へ)>位置格(で)>助格(で)>基準格(で)>奪格(から)>所有格>起点格>随格(と)(井上(1975:13))
- ⁴ 寺村は感覚の名詞について、以下のような説明をしている。
人間の認識には、知的・概念的なものに加えて、感覚による認識もある。動詞でいえば「見ル、聞ク、匂ウ(嗅グ)、味ワウ、(サワッテ)感ジル」などがその活動を表わすもので、名詞でいうと「姿、形、色、音、匂イ、味、感触」さらに「絵、写真、光景」等々も知覚を表わすものとしてあげられる。
(寺村(1977b:24))
- 本稿では、寺村が感覚の名詞としたもののうち、「さんまを焼くにおい」のように、修飾部の事態が生起した結果、主名詞が生じるという関係のものはA型と考え、その他の「夜遅くまで研究に没頭している姿」のように主名詞が修飾部の事態の捉え方を表わすものをB型と考える。
- ⁵ Matsumoto(1997)はNH-typeについて、修飾部が主名詞を補足する関係にあり、かつ主名詞が引き起こす内容のフレームについて修飾部が語っているとし(Matsumoto(1997:135))、主名詞にくる名詞は「伝達に関わる名詞(Nouns of Communication)」「(話、発言、発表など)」「思考・感情を表わす名詞(Nouns of Thoughts and Feelings)」「(予感、決意、願望など)、その他(主義、事実、癖など)があるとしている。

【引用・参考文献】

- 井口厚夫(1995)「短絡節とコロケーション」『獨協大学教養諸学研究』第 29 巻第 2 号, pp.10-21, 獨協大学学術研究会。
- 井上和子(1975)「構造と生成」『国語学』第 101 集, pp.66-49, 国語学会。
- 井上和子(1976)『変形文法と日本語(上)』大修館書店。
- 大島資生(2010)『日本語連体修飾節構造の研究』ひつじ書房。
- 奥津敬一郎(1974)『生成日本文法論』大修館書店。
- 加藤重弘(1999)「日本語関係節の成立要件(1)—先行研究の整理とその問題点—」『富山大学人文学部紀要』第 30 号, pp.65-111, 富山大学人文学部。
- 加藤重広(2003)『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房。
- 加藤重広(2004)「連体修飾の語用論」『日本語学』第 23 巻第 3 号, pp.28-38, 明治書院。
- 加藤重広(2010)「日本語の連体修飾表現の類型と特性」上野善道(監修)『日本語研究の 12 章』pp.151-164, 明治書院。
- 白川博之(1986)「連体修飾節の状況提示機能」『言語学論叢』第 5 号, pp.1-16, 筑波大学一般応用言語学研究室。
- 高橋太郎(1959)「動詞の連体修飾法」『国立国語研究所論集 ことばの研究』第 1 集, pp.169-182, 国立国語研究所。
- 高橋太郎(1965)「動詞の連体修飾法(二)」『国立国語研究所論集 2 ことばの研究二』第 2 集, pp.39-62, 国立国語研究所。
- 高橋太郎(1979)「連体動詞句と名詞のかかわりあいについての序説」言語学研究会(編)『言語の研究』pp.75-172, むぎ書房。
- 高橋美奈子(2006)「節による名詞修飾表現の分類の一試案」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎(編)『日本語文法の新地平 3 複文・連文編』pp.77-97, くろしお出版。
- 寺村秀夫(1975)「連体修飾のシンタクスと意味—その 1—」『日本語・日本文化』第 4 号, pp.71-119, 大阪外国語大学研究留学生別科。
- 寺村秀夫(1977a)「連体修飾のシンタクスと意味—その 2—」『日本語・日本文化』第 5 号, pp.29-78, 大阪外国語大学研究留学生別科。
- 寺村秀夫(1977b)「連体修飾のシンタクスと意味—その 3—」『日本語・日本文化』第 6 号, pp.1-35, 大阪外国語大学研究留学生別科。
- 寺村秀夫(1978)「連体修飾のシンタクスと意味—その 4—」『日本語・日本文化』第 7 号, pp.1-24, 大阪外国語大学研究留学生別科。
- 寺村秀夫(1980)「名詞修飾部の比較」國廣哲彌(編)『日英語比較講座第 2 巻文法』pp.221-266, 大修館書店。
- 日本語記述文法研究会(編)(2009)『現代日本語文法 2』くろしお出版。
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版。
- 益岡隆志(1997)「「魚の焼ける匂い」—因果関係を表す連体修飾節表現」『月刊言語』第 26 巻第 2 号, pp.44-49, 大修館書店。
- 益岡隆志(2000)「連体修飾における縮約節」『日本語文法の諸相』pp.215-232, くろしお出版。
- 益岡隆志(2002)「複文各論」野田尚史、益岡隆志、佐久間まゆみ、田窪行則『日本語の文法 4 複文と談話』pp.63-116, 岩波書店。
- 益岡隆志(2009)「連体節表現の構文と意味」『月刊言語』第 38 巻第 1 号, pp.18-25, 大修館書店。
- 松木正恵(2000)「連体修飾節のとらえ方—序説」『早稲田日本語研究』第 8 号, pp.1-9, 早稲田大学国語学会。
- 松本善子(1993)「日本語名詞句構造の語用論的考察」『日本語学』

第 12 卷第 11 号, pp.101-114, 明治書院.

松本善子(2007)「フレームの統合—日本語の複合名詞句構造—」

久野暲、牧野成一、スーザン G ストラウス (編)『言語学の諸相』 pp.144-154, くろしお出版.

師井恵子(2016)「意味関係による連体修飾分析」大阪大学大学院言語文化研究科修士論文.

Matsumoto, Yoshiko (1997) *Noun-Modifying Constructions in Japanese: A Frame-Semantic Approach*, John Benjamins Publishing Company.